

〔I〕 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

イタリア半島中部のローマは、前6世紀末にエトルリア人の王を追放し、共和政ローマを発足させた。この国家は、内部では身分間の闘争が頻発したが、対外的には拡張政策を続け、前3世紀前半にはイタリア半島全域を支配下におさめた。さらにその後も、ポエニ戦争をきっかけにシチリア島を属州としたのはじめとして、地中海沿岸各地に勢力を広げた。しかしあいつぐ戦争による農民の没落、そして格差の拡大により社会は不安定になり、前2世紀末からは「内乱の1世紀」と呼ばれる時代を迎えた。この混乱を収拾したオクタウィアヌスがアウグストゥスの称号を名のった前27年以降を、帝政時代と呼んでいる。

これ以降の約200年間、帝国の平和と安定が維持され、特にいわゆる五賢帝の時代は、ローマ帝国の最盛期とされている。支配領域は地中海周辺全域におよび、大規模な交易活動が展開され、経済的におおいに繁栄した。帝国各地で新たな都市が建設され、ローマ風的生活スタイルが持ち込まれた。ローマの精神文化はギリシア文化の模倣であったともいわれるが、社会の安定を背景に、文学、歴史学、地理学、哲学、自然科学など各方面で多くの業績が生み出され、後世に大きな影響を与えた。

ローマでは多くの神々が信仰の対象となったが、東方起源の密儀宗教に精神的安定を求める人々も多かった。1世紀以降は、イエスを神の子と信じるキリスト教がしだいに支持者を集め、各地に信徒の団体を形成していった。皇帝はキリスト教徒を危険視し、特にディオクレティアヌス帝は大規模な迫害をおこなったが、その後帝国はキリスト教を公認する方針へと転換した。そして数回にわたる公会議が開催されて、教義が定められていった。また、特に重要な総大司教座が置かれた5つの教会は、五本山と呼ばれた。

ローマ帝国は4世紀末に東西に分割された。東ローマ帝国では都市を中心とした活発な商工業が維持され、特に6世紀のユスティニアヌス帝の時代には、一時的に、かつてのローマ帝国の支配領域の大半を回復させる勢いを見せた。

しかし西側では、社会の混乱により帝国の統治体制は維持できなくなった。各地でゲルマン人の王国が建設され、5世紀末には西ローマ皇帝権自体が消滅し

た。ゲルマン系の王国は、短命に終わったものも多いが、ガリア北部を中心としたフランク王国はメロヴィング朝の王権のもとで比較的安定した体制を築いた。そして8世紀に成立したカロリング朝フランク王国は、一時的に西ヨーロッパの広い範囲を統一し、その後の中世ヨーロッパ世界の基礎を築いた。

設問 1. 下線部(1)に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

- A. リキニウス・セクステウス法により、平民会の決議が国法として認められるようになった。
- B. 元老院は、公職経験者の貴族によって構成された。
- C. 貴族から、任期1年・2名のコンスルが選ばれた。
- D. 護民官は、元老院やコンスルの決定に対して拒否権を行使できた。

設問 2. 下線部(2)の二番目の皇帝で、ローマ帝国の最大領土を築いた人物の名前を解答欄に記入しなさい。

設問 3. 下線部(3)に関連して、ローマ帝国の社会・経済に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

- A. ラティフンディアの所有者は、ブドウやオリーブの栽培で収益をあげた。
- B. 季節風貿易により、中国・東南アジア・インドの産物がもたらされた。
- C. 帝政時代初期にソリドゥス金貨が創設され、地中海交易で用いられた。
- D. 都市では、富裕な貴族や市民が民衆に食事や娯楽を提供し、社会不安の回避につとめた。

設問 4. 下線部(4)に関連して、ローマ帝国に起源をもつ都市を一つ選んでマークしなさい。

- A. アムステルダム
- C. ウィーン

- B. ベルリン
- D. キエフ

設問 5. 下線部(5)に関連して、一種の百科全書である『博物誌』を執筆して自然科学を集大成した人物の名前を解答欄に記入しなさい。

設問 6. 下線部(6)に関連して、初期のキリスト教に関する説明として、最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

- A. 1世紀に、現在の形の『新約聖書』が成立した。
- B. 3世紀後半から、エジプトの砂漠に住む苦行者が現れた。
- C. 異端とされたネストリウス派は、6世紀以降、コプト教会、シリア教会、アルメニア教会などを作った。
- D. エウセビオスは『告白』や『神の国』などを著し、キリスト教信仰の基礎を築いた。

設問 7. 下線部(7)が置かれた都市として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

A. ローマ

B. アレクサンドリア

C. アンティオキア

D. ミラノ

設問 8. 下線部(8)に関する説明として最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

A. 西ゴート王国を滅ぼした。

B. ポリビオスらに命じて、『ローマ法大全』を編纂させた。

C. 中国から養蚕技術を導入した。

D. 聖像崇拜禁止令を出した。

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

東南アジアでは前 2000 年頃に中国から稲作が伝えられ、農業地帯が形成された。紀元前後からはインドや中国との交流が盛んになり、各地に港市国家が誕生した。⁽¹⁾

5 世紀には中国で南海の物産に対する需要が拡大し、東南アジアでは東西の国際市場と連動した形で港市国家の交易網が形成された。これに伴い、中華文明やインド文明が東南アジアに伝えられた。国家建設の動きは諸島部でもみられた。⁽²⁾
ジャワ島では 10 世紀以降、農業に基盤を持つ港市国家が栄え、インド文化を吸収した独自のジャワ文化が開花した。⁽⁴⁾

ベトナムの北部地域は、前漢時代以来、中国に服属していたが、11 世紀初めに李氏が大越国をたて、李朝を成立させた。⁽³⁾カンボジアではクメール人の王国が勢力を拡大し、13 世紀にはアンコールを中心に広大な交易路を支配下に置いた。その影響下でタイ人の政治的自立の動きも進んだ。ビルマでは 11 世紀にバガン朝が成立し、⁽⁶⁾ベンガル湾と雲南をむすぶ交易で栄えた。

南シナ海は、古くから中国と東南アジアを結ぶ交易ルートとして重要であった⁽⁷⁾が、この地域の情勢は中国側の動向に大きく左右された。

15 世紀初めにおこなわれた、明の鄭和による遠征以来、マラッカ王国が対明貿易で繁栄した。この国は明への朝貢貿易を続ける一方で、西方のムスリム世界との関係を深めた。⁽⁸⁾13 世紀末にはスマトラ島に東南アジアで最初のイスラーム国家が誕生し、15 世紀以降は東南アジア各地でイスラーム政権が成立していった。⁽⁹⁾そして次の 16 世紀には、香辛料貿易への参入を求めてヨーロッパ人が東南アジアに姿を現し、⁽¹⁰⁾この地域の歴史は新たな段階へと移行していく。

設問 5. 下線部(5)に関する説明として適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

クしなさい。

A. 元軍を撃退した。

B. 昇竜(ハノイ)を都とした。

C. 科擧を導入した。

D. 紅河(ホン川)デルタの開拓による農業生産の拡大に努めた。

設問 6. 下線部(6)に関連して、14世紀中ごろタイ人によってチャオプラヤ川流域に建てられた王朝の名を解答欄に記入しなさい。

設問 7. 下線部(7)に関連して、唐末から宋代にかけての南シナ海情勢に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

A. 黄巢の乱で広州が破壊されたため、インド洋からの船はマレー半島まで撤退した。

B. 10世紀ごろにダウ船が中国で開発され、交易に用いられた。

C. 中国から白磁や青磁が各地の沿岸都市に輸出された。

D. 東南アジア諸国は宋に朝貢し、特産品を中国市場にもたらした。

設問 8. 下線部(8)に関連して、ムスリム商人がインド洋からマラッカにもたらした主要商品として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

A. 香辛料

B. 宝石

C. 銀

D. 絹

設問 9. 下線部(9)に関連して、東南アジアのイスラーム化に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

A. 13世紀に諸島部を中心にムスリム商人や神秘主義教団が活動した。

B. 15世紀半ば、マラッカの王は、イスラームを旗印に掲げてタイの勢力拡大を阻止した。

C. ジャワ島でイスラームのマジャパヒト王国が成立した。

D. スマトラ島北部でイスラームのアチェ王国が成立した。

設問10. 下線部00に関連して、16世紀以降のヨーロッパ人による東南アジア・東アジア進出に関する説明として、最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

- A. メキシコからマニラへ大量の銀が運ばれた。
- B. スペインは1511年にマラッカ王国を占領した。
- C. ポルトガルは1557年に広州に居住権を得て対中国貿易を展開した。
- D. オランダはスマトラ島を拠点に海上交易の支配を試みた。

(III) 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

13世紀末のアナトリアにおこったオスマン朝⁽¹⁾は、14～15世紀にアナトリアおよびバルカン半島をほぼ支配下におさめ、16世紀には東地中海を中心とする大帝国を築いた。その東方では、16世紀初頭に成立したサファヴィー朝⁽²⁾によってイランが統一された。サファヴィー朝はシーア派のなかの十二イマーム派を国教に採用し、スンナ派のオスマン帝国やウズベク人としばしば争った。

18世紀に入ると、オスマン帝国の統治にゆるみが生じ、またサファヴィー朝も崩壊するなど、イスラーム世界の政治体制は混乱し始めた。これをきっかけに、18～19世紀の西アジアでは多様な勢力による改革運動が展開された。

⁽³⁾オスマン帝国の属州であったエジプトでは、19世紀初めにムハンマド＝アリ⁽⁴⁾が実権を握って改革を進めた。そしてオスマン帝国との戦いにも勝利したが、エジプトの強大化を恐れたヨーロッパ列強の介入を招き、19世紀半ば以降、ヨーロッパ諸国への従属を強めていった。また、スーダンでは、ムハンマド＝アフマド⁽⁵⁾らの指導により、エジプト・イギリスの連合勢力に対抗する運動が展開された。

オスマン帝国では、1839年にアブデュルメジト1世が勅令を發布して司法・行政・財政・軍事にわたる大規模な改革に着手した。しかし改革に反発する勢力も強く、またヨーロッパ諸国の強い影響にさらされ、19世紀のオスマン帝国の情勢は安定しなかった。⁽⁷⁾

イランではサファヴィー朝崩壊後の混乱を経て、18世紀末にカージャール朝⁽⁸⁾が成立した。19世紀になるとイランでもヨーロッパ列強の介入が相次ぎ、1848年には政治の混乱や社会不安を原因とする民衆反乱も生じた。⁽⁹⁾

⁽¹⁰⁾19世紀後半以降、西アジア諸地域へのヨーロッパ列強の進出は本格化した。各地の政権の基盤は大きく揺らいだが、これを改革して新たな体制を打ち立てようとする動きも生じた。

設問 4. 下線部4)に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

- A. アラビア出兵を契機にマムルーク勢力を一掃した。
- B. オスマン帝国に対抗して、ギリシア独立運動を支援した。
- C. 綿花など商品作物を奨励し、農産物の専売をおこなった。
- D. スーダンを征服した。

設問 5. 下線部5)に関連して、19世紀半ば以降のエジプトに関する説明として、最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

- A. 1840年のロンドン会議で、シリアの領有を認められた。
- B. イギリス人レセップスの提案を受け、スエズ運河を開削した。
- C. イギリス首相チェンバレンは、スエズ運河会社の株を買収した。
- D. 立憲制の確立や議会の開設を求めるウラービー(オラービー)運動が起こった。

設問 6. 下線部6)の運動の名称を解答欄に記入しなさい。

設問 7. 下線部7)に関する説明として、最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

- A. 流通を担ったギリシア人やアルメニア人などキリスト教徒が勢力を強めた。
- B. イェニチェリ軍団が改革され、機能を強化された。
- C. 1838年にロシアと通商条約が結ばれ、ロシア商人の特権が承認された。
- D. クリミア戦争での勝利により、国家財政が改善された。

設問 8. 下線部8)に関する説明として、最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

- A. 首都はイスファハーンに置かれた。
- B. ヨーロッパ向けのじゅうたん生産などで経済が発展した。
- C. トルキスタンをめぐる争いでロシアに敗れ、1828年にトルコマンナヒーイ条約を結んだ。
- D. 1838年以來、イギリスの支援を得てアフガニスタンへの侵攻をくりかえした。

設問 9. 下線部9)の反乱のもとになった宗教の名を解答欄に記入しなさい。

設問10. 下線部10)に関連して、19世紀末から20世紀初頭にかけての西アジア諸国に関する説明として、最も適切なものを一つ選んでマークしなさい。

- A. ベルリン会議でバルカン半島の領土を大きく失ったオスマン帝国では、ミドハト＝パシャによる改革がおこなわれた。
- B. 青年トルコ革命でオスマン帝国に成立した新政権は、オスマン主義をかけた。
- C. イランでは、シーア派のウラマーを中心にタバコ＝ボイコット運動が組織された。
- D. 18世紀にイランから自立したアフガニスタンは、第1次および第2次アフガン戦争に勝利して完全に独立した。

〔IV〕 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

第二次世界大戦で甚大な被害をこうむったヨーロッパ諸国⁽¹⁾は、戦後、新たな体制のもとで社会・経済の復興にとりくんだ。しかし戦後の国際秩序をめぐるアメリカ合衆国とソ連の対立はしだいに激しくなり、ヨーロッパ諸国も冷戦⁽²⁾の構造に巻き込まれていった。西欧5カ国は1948年に西ヨーロッパ連合条約を締結し、1949年にはアメリカ合衆国やカナダも加わって集団防衛機構としての北大西洋条約機構(NATO)が結成された。ソ連と東欧6カ国は1949年に経済相互援助会議(COMECON)を創設し、1955年には東ヨーロッパ相互援助条約(ワルシャワ条約機構)が発足した。両陣営が衝突する場となったドイツ⁽³⁾は東西分裂の状態が続いた。

1950年代から60年代の西欧諸国⁽⁴⁾は経済復興が進み、また地域統合によって国際的な影響力の低下に対応しようと試みた。アジア・アフリカ諸国に対する植民地支配は第二次世界大戦後も続けられたが、独立を求める動きが拡大するにつれ、ヨーロッパ諸国はしだいに植民地を手放していった⁽⁵⁾。

東欧諸国はソ連の強い影響下に置かれた。しかしスターリンの死去を境に、ソ連は西側諸国との共存路線を模索し始め、その影響は東欧諸国にもおよんだ⁽⁶⁾。

1967年に西欧6カ国によって成立したヨーロッパ共同体(EC)⁽⁷⁾は、しだいに統合を強化し、また加盟国を増やしていった。1960年代後半以降、アメリカ合衆国とソ連の間の緊張緩和の影響がヨーロッパにも少しずつ現れ、1975年にはヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国・カナダの首脳が参加して全欧安全保障協力会議⁽⁸⁾が開催された。

経済の立ち遅れなど深刻な危機に対処するため、改革路線を採用したソ連書記長ゴルバチョフは、1988年の新ベオグラード宣言で東欧社会主義圏に対する内政干渉を否定した。これをきっかけに東欧諸国の改革が加速し、89年末までにほぼすべての東欧諸国で体制の民主化が実現した。

1980年代以降、EC諸国はさらに統合を強化し⁽⁹⁾、1993年にはEUが発足した。しかし冷戦後のヨーロッパは、国家間の経済格差や移民の増大など新たな課題も抱えている。

設問 3. 下線部(3)の冷戦期における状況に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

- A. 1948年に、ソ連は西側地区の通貨改革に反対して西ベルリンへの交通を遮断した。
- B. 1949年に、社会主義統一党を中心に、ドイツ民主共和国(東ドイツ)成立が宣言された。
- C. 1970年に、ドイツ連邦共和国(西ドイツ)のコール首相は、ポーランドと国交正常化条約を締結した。
- D. 1973年に、東西ドイツは国際連合に同時に加盟した。

設問 4. 下線部(4)に関連して、1950～60年代の西欧情勢に関する説明として、適切でないものを一つ選んでマークしなさい。

- A. 1952年に、フランス外相シューマンの提案にもとづき、ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体(E C S C)が発足した。
- B. 1960年に、イギリスは北欧諸国とともに、ヨーロッパ自由貿易連合(E F T A)を結成した。
- C. アデナウアー首相のもとで、西ドイツが北大西洋条約機構(N A T O)に加盟した。
- D. フランス大統領ド=ゴールは、議会の権限を強化させた第五共和政憲法を成立させた。

設問 5. 下線部(5)に関連して、民族解放戦線(F L N)による闘争の結果、1962年にフランスから独立した国の名を解答欄に記入しなさい。

設問10. 下線部(10)のきっかけとなった紛争が生じた国あるいは地域の名称を一つ

選んでマークしなさい。

A. ボスニア=ヘルツェゴヴィナ

B. コソヴォ

C. クロアチア

D. マケドニア